世界って広いんだね

椰代

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
世界って広いんだね

【Ｎコード】
Ｎ０６８６Ｚ

【作者名】
椰代

【あらすじ】
女子高校生なう～なあたし、桧山（ひやま）　蒼（あお）は模試の当日に寝坊。前日の夜中に「寝坊したら奢ってね」と弟の空に言われていたのに（略）。気持ちを切り替えて車内勉強するあたしに襲いかかってきたのは睡魔、という名のプロローグでした。

※考えていたものよりかなり脱線しました。弟設定を入れたことによって、、
予想外～なことに話がうんたらしそうなんで、一応Ｒ１５出して

おきます。

1章＊登場人物

＊主人公：桧山（ひやま）　蒼（あお）　１７歳。女子高生。＋@黒髪（ボブ）、黒目
・学校では美人のギタリストで人気者
・勉強よりも、放課後のバンド活動やバイトが好き
・朝は低血圧で機嫌が悪い
・恋人は作らない主義（理由有）

＊弟：桧山（ひやま）　空（そら）　１６歳。高校生。
・学校内でイケメンと噂の的。本人興味なし
・成績優秀、推薦入学で学校期待の星
・朝から爽やかに登校できる
・恋人は作らない（隠れシスコン）

＋@家族構成：父母（サラリーマン）（専業主婦）主人公・弟

＊案内役：（後に）銀
・森の案内をしてくれる
・トリップ先ではパートナー

＊青年：（後に）空
・送られる世界の神様

1章＊登場人物（後書き）

章の区切りごとに登場人物を入れることにします。

あたしの５６０円（前書き）

この小説に興味を持っていただけてありがとう。
嬉しいです。異世界トリップって魅力的ですよね！
よろしくお願いします

あたしの５６０円

「蒼(あお)っ！！起きなさい！！遅刻するわよ！！」

―ある秋晴れの朝。
あたしはいつもどおり母に布団をはぐられ、自分の温もりから引き離された。

「いつまで寝てるの！！早く立つ！！起きるっ！顔洗う！！」

あぁ・・・うるさい。低血圧のあたしの頭には母さんの甲高い声に顔を思いっきりしかめた。
言い返そうとしてふとデジタル時計を見、次の瞬間母さんが顔をしかめた。

「は、８時？！」

「だからさっきから言ってるじゃない！遅刻するのよ貴方！急ぎなさいね」

と言って、ぱたぱたと部屋を出て行った。
・・・やばい。今日は朝から模試なのに。あたしは頭をフル回転させた。
テストは9時から。学校まで３０分。テスト１５分前に着席完了。
だから準備時間、１０分以内。
考えながら制服に腕を通しスカートのホックを留めてかばんを抱えて家を飛び出した。

駅のホームまで猛ダッシュしたが、行ってしまったばかりなのか。

エントランスの最前列に並べた。ケータイで時間を確認すると、予想より一本早い電車に乗ることができるようだ。
よかった、遅刻はなんとか免れそう。まだ寝癖が収まりきっていない髪の毛をしばらく撫で付けながら思っていると、電車の到着するときのメロディーが流れた。

扉が開いて、乗客が雪崩のように降車する。あたしが乗車する頃には、珍しく乗車シートに座れた。
あぁ、間に合ってよかった。今日は（寝坊して）ついてないけど、（遅刻免れるから）ついてる。
何気なくケータイを開くと新着メールがあった。弟から。

『寝坊　乙b
あと俺、購買のパンセット（５６０円）ね？』

「・・・」

そう言えば昨日、というか今日の夜中にに「蒼いつまで起きてんの？また明日たたき起こされんぞ」と寝坊ゼロの弟にニヤ顔で言われたので「そんなことする訳ないじゃん」と反論して、「じゃあ賭けようか。蒼、寝坊したら奢れよ」と言われ「じゃぁあたしパンセット（５６０円）ね」と乗ってしまったんだった。・・・なんてこった。あたしの買い食い費が弟に・・・

とりあえず電車独特の走行音を聞きながら学校最寄駅に着くまでの間、かばんから英単語帳を出して、テスト対策に集中することにした。だがしかし。数十分前まで寝ていたにも関わらず眠い。何故かとにかく眠い。頭を軽く振りなんとか紛らわそうと瞬きもする。でも眠い。

馴れないことするもんじゃないなあ～どうせ終点だし、寝てしまおう。

潔く折れたあたしは、単語帳を閉まってかばんに顔を埋めた。

あたしを呼ぶ声（前書き）

あたしを呼ぶ声

心地よい風があたしの体を撫ぜる。自分の体が湿った土の上に横たわっている感覚。

あれ・・・？あたしは電車のシートで寝てるんだよね。何故に土・・・？

くわっと目を開けば。

「・・・。どこじゃらほい」

――あたしの知らない森。そしてあたしは土の上。

自分、こんな場所で何してるんでしょう。何で森！電車どこ！模試はどうする！パンセット売り切る！！てかどこだここ、もうやだ現実逃避したい。

「・・・。とりあえず誰かに連絡しとこう」

それから2時間ほどだと思う。　あたしは気づかされた。持っていたはずのケータイはかばんを探しても制服を探しても、どこにもないことに。

連絡手段はなし、と・・・

そこであの岩場に留まっているよりも、自分の勘を信じて現地の人を探すことにした。

日本でいう春の午後3時くらい、だろうか。　森は太陽の陽気を

十分に蓄えているせいかぽかぽかとして暖かかい。きらきらとした木漏れ日に癒されながら歩き続けた。

けれどもあたしは女子高生。馴れない森を歩き続けるスタミナは限られている。時間は待ってくれない。気がつけば太陽はゆっくり傾いてきていた。肌で感じる風も冷たい。もうかなり歩いたはずなのに人も、鳥も見当たらない。太陽は沈む手前。

どうして誰もいないのか。急に大きな不安と寂しさがが押し寄せてきた。

「・・・っ」

あたしの体は長時間馴れない森を歩き続けた疲れからか、細い木の根に足を引っ掛けて少しひざをすりむいてしまった。立ち上がって、汚れを落す気にもなれなくて。その場にしゃがみこみうずくまった。さっきとは違った、夜の風があたしの体温を奪っていく。

”蒼”

誰かが自分を呼んだような気がしたのと同時に、
家に着いたときのような、安心感が体を包み込んだ。あたしが顔を上げると、

「・・・。」

目の前に狼に似た真っ白の動物がじっとあたしを見つめていたので驚いた。

”蒼”

また、聴こえた。さっきと同じ声だ。耳から入ってくる声でなく、頭に直接響く弟に似た声。

あたしは試しに、どうすれば帰れる、と単刀直入に問いかけた。

”・・・目の前の彼について行けばいい”

間を置いて声の主から返事があった。

わかりました、と返事をし、次いで目の前の白い狼と目を合わせる。

狼はあたしの目を見るとぱちっと瞬きをしてから、くるりと背を向けて歩き出した。

悪い感じはこれっぽちも感じない。あたしは迷わずその背中についていった。

あたしを呼ぶ声（後書き）

ありがとうございました。
よければ感想、聞かせてください（＾ω＾）

声の主は予想外（前書き）

私も予想外です。

声の主は予想外

辺りはすっかり暗く静まり返っている。でも、白い狼を見失ってしまうことは1度もなかった。

ところでこの案内役、狼って言っちゃっていいんだろうか。それはもう真っ白なすんばらしいキューティクルの毛並み。馬くらいの大きさで、ふっさふさのしっぽが何故か2本。

うん、わかりやすく例えるとジ○リのヤマイヌさん。実は彼も山の主だったりして。

歩くたびに揺れるしっぽを見ていると、心が和む。でも、しっぽが2本もある大きい狼なんて、ＤＶＤでしか見たことがない。いるはずもない。今思い返せば、今から会う声の主も謎だ。そもそもあたしはいつテレパシー能力に目覚めたんでしょう。顔も知らない誰かと普通に会話しちゃったけどさ。

「・・・。」

そこまで行き着いてあたしは考えるのを止めた。だって今から会える声の主は、きっとあたしのことを知ってる。あたしが電車に乗っていて、こんな状況になっちゃったミステリーも知ってる。というか、もしかすると関係者かもしれない。何はともあれ会ったら全部聞き出そう。

しばらくして、森がひらけて大きな湖が見えてきた。月は出てい

ない。星が、輝いている。あたしには大地が煌めいて見えた。なんて神秘的なんだろう。足を運ぶのも忘れてあたしは立ち尽くした。

案内役の彼は湖の傍まで行って、後ろのあたしに向き直った。じっとこちらを見つめてくる。

こっちだよと言われたような気がしたから、あたしも彼の隣まで歩み寄った。

「うわぁ・・・！　綺麗・・・！！」

宝石がちりばめられた水面を覗き込むようにしてかがむと。

「蒼。待っていたよ」

「えっ！？わっ・・・と！」

突然傍で生身の声がしたので驚いて体勢を崩してしまった。

湖に落ちる！と目を瞑ったけど、ぐいっと強い力で引き上げられる。

「いやあ、危ない危ない」

苦笑が混じった声の主の声。あたしが恐る恐る顔を上げると。

「・・・（う、わあ、綺麗）」

動揺で声がでなかった。若い青年だ。弟に似ている、ような気がする。でもあたしが一番目を惹かれたのは翡翠色の目。日本人をやってるあたしにはもちろん縁がない色で。そもそも外国人で翡翠色の目の人なんているんだろうか。

いやいや。見惚れてる場合じゃないよ自分。この人には聞きたいことがたっくさんあるんだから。

「ということで、ここ何処ですか？あたしを地球、日本に返してください」

と目を見て単刀直入に聞いた。大丈夫。この人には全部わかってる。たぶんだけど。今は初めてのアローンサバイバルで極度のホームシックなんだ。言葉足らずは堪忍してください。後はもう今すぐ家に帰りたいです。

声の主はというと、あたしと目が合った数秒間、目を見開いて硬直していた。そして次の瞬間、くすりと声を出して笑った。

「・・・何がおかしいんですか」

疲れていて早く返りたいあたしは声の主を睨んだ。

「ここが君のいた世界じゃないってことはもうわかってるんだね。
悪いが蒼を元の世界には返せない。蒼、、君は元の世界では他界しているんだよ」

「え・・？」

「君は朝、寝坊して遅刻しそうになって電車に乗った。その電車が事故に遭ったんだ」

「・・・」

「・・・。おいで。見てご覧」

青年は湖に近寄って、水面に片手をかざした。すると水面に家族が映る。父さん、母さん、友人達。皆が喪服を着て順番に手を合わせていた。弟は見当たらなかった。そして祭壇の上には、あたしの笑う写真。

「君は本来、命の流れにしたがって他の命たちと魂の川を廻る筈だったんだけどね・・・
俺がたまたま見つけたんだよ。だから捕まえて連れてきたんだ。」

「・・・どういうこと？」

青年の説明曰く、命は廻り、ある一定の周期がやってくると、どこかの世界に根付くらしい。
そしてあたしはあの電車で死んだ後その周期に乗って廻り始めるところを、この人に捕獲された、らしい。まさか自分が他界しているっていうのは予想外。この人に連れてこられたっていうのも予想外。

もうどうでもいい。全てが予想外なんだもん。

「ところで蒼、今度はこっちの世界で生きてみる気はない？」

青年は真剣な目であたしに尋ねた。何かあるのかと思ってあたしも真剣に返した。

「・・・あたしに何か役目があるんですか？」

「え？役目なんてないよ。俺のわがままだし」

「・・・え？」

さらっと言った。今この人さらっと言ったよ！わがままって！わがままって何！！

動揺が顔に出たのか否か、青年は宥めるようにこう続けた。

「ははっここは俺の世界なんだよ。蒼に行って欲しい世界ってここじゃなくて、

俺が神様の世界のこと」

「・・・待て待て待て。あんたが神さま？」

弟に似ている分、信じらんねえですよあたしは。何か怖いんだけど。

あたしの動揺に対して青年は笑顔で答える。この笑みは、、

「いやだなあ蒼。行けばわかるよ行けば。そう、行ってみなくちゃわからない」

態度がコロコロ変わる青年の顔はもはや神と思えず。弟の外国人バージョンに見えてしまう。
うん、青年のそれは、弟のシニカルな空にそっくりで。

「君は俺の波長とすごく相性がいいんだよ。これも何かの縁と思ってさ」

青年は呆然とするあたしを見て、面白いのか何なのか。とにかく笑いが止まらないらしい。ツボに入ると中々抜け出せないところもそっくりである。ますます弟に見える。

「ふ・・・あはははっ！ダメだもう俺もう説明無理〜　とりあえず俺の世界に送ってあげるね？
心配しないで。ちゃーんと必要な知識は行く前に伝えるからね。
あぁ・・・嫌なんて言わせないよ。俺と相性の合う魂なんてもう随分巡り会ってないんだから」

拒否権ナシってか。しかも後半から青年の言葉は急に声色が下がった。それに目がなんていうか・・・　獣・・・？身の危険を感じて後ずさるには遅かった。

「・・・！！」

はっと気づいたときには腕を引き寄せられ、腰に手を回され、顎先をつかまれ顔を持ち上げられていた。・・・何この恋人的状況。顔が弟と似てるせいか全然ときめかないんだけど。

「はあ、鈍いなぁ、、ちゃんと警戒してよね。・・・蒼姉さん？」

「え?!って空?!　な・・・んっ」

確認する前に唇を重ねられてしまった。
そこから何か、大きな力のようなものと、空が神であろう国に関するであろう歴史、知識、全てが鮮やかに流れ込んできた。あたしは青年から伝わるそれに驚いて、手で押し返そうとしたが、やんわりと止められた。そして大量の情報に頭痛がしてきた。

あたしは、意識を手放した。

声の主は予想外（後書き）

どうしようすごく予想外に・・・！！

送られたというか落された。（前書き）

蒼は犬が好きです

送られたというか落された。

あの青年に初めての口付けという形で世界に関わる情報を得たあたし。

まだ夢のようなふわふわとした感覚の中。あたしはその情報を大方にまとめるとこうだ。

まずキスしてきた変態兼青年。あれは日本で生きていた弟の魂の半分らしい。

何で半分かなんて突っ込まない。頭に入ってきた情報はややこしくて、思考回路単純なあたしには説明できません。とにかく弟だと言われたので空と呼んでいいか、と尋ね了承されたのでよし。弟にキスされたのかという危ない線もノーカウントでいこう。口付け以上の線は超えてないもん。

次に森で案内役をしてくれた彼（大きなおおかみもどき）。あたしと一緒に送られるらしい。空曰くイイパートナーになってくれるだろうから、名前も付けてやって、だって。うんわかったよ。ぴったりの名前考えるね。

そしてあたしが送られる世界。５つの大きな国で成り立っていて、東に水の国、西に風の国、南に火の国、北に地の国。そして中央に天座（あまざ）。あとは日本でもよくあった某ファンタジーに似ている。ギルドが存在し、モンスターもどきが居て、魔法が存在する。

その他、かくかくしかじか。そこら辺はレッツ経験、だそうです。そして最後に

”いつも見守ってるよ、蒼。”

そんな言葉を残され、あたしの意識はそこで背中に衝撃を感じることで遮断された。

「いっ！たーい・・・」

あたしは柔道で背負い投げされたような痛み（されたことないけど）に顔をしかめながら体を起こした。見渡せば周りはとにかく白。教会のような細工の石造りの壁、柱、祭壇。いくつかある小さめの高い天井窓から光が差し込んでいる。ここは天座に存在している神殿だ。そして祭壇の上にはまさかの巨大な弟像。しかもありえないほど白いエンジェルスマイル。

”いつも見守っているよ、蒼”　ふと、空の最後の言葉が頭をよぎる。

空の言葉を思い出し、お前はどこぞのシスコンかと眉間にシワを寄せていたところ、ふしゅんっと鼻息を横からかけられた。振り向くと案内役の彼がじっと見つめている。

「ご、ごめんごめん！空の白い笑顔、小さいころ以来見たことなかったからさ・・・」

思わず本音が出てしまって言葉につまる。彼はじっと聞き入って、

あたしを見つめたまま。そこでふと思い出す。名前、あげるんだった。

「・・・」

「・・・」

しばらく無言でお互いを見つめ合う。あたしは目の前の彼をじっと観察して気づいた。彼の毛並みは神殿の白に属していない。彼の白はもっとこう、なんというか・・・

「銀・・・？」

に近い気がする。　彼の耳がくいくいっと動き、ふぁさり、２本のしっぽが揺れたので、

「銀」

はっきりと呼べば。彼は近寄って頭を摺り寄せてきた。さらさらした毛並みとじんわりくる温もりに自分の頬が緩むのを感じた。

「銀、あったかいね」

立ち上がって銀の首に手を回し、ぬくもりを確かめるように、顔を埋めると安心感に包まれた。

しばらくそうしていると、銀がぴくりと反応し扉を警戒し始めた。何かと思い耳を澄ませば慌てたような複数の足音、話し声が近づいて来る。あたしは顔を上げて隠れられるような場所は無いか探した

けど、ここは神殿。見晴らしがよすぎる。あたしはまだしも銀も隠れられそうな場所は見当たらない。

あたしは頭をフル回転させ対応を考えた。
相手は味方じゃないからあたしは何をされるかわからない。ここは隠れる場所なし。扉は一つ。
とすれば、できることも一つ。

「銀。逃げるよ」

あたしの考えを察してくれた銀は、あたしを背に乗せ、祭壇のほうへ移動し、扉に向かって身構える。ばたばたと足音は近づいてきて、扉が一瞬光った瞬間。

「今だ」

あたしの合図と同時に、銀は扉に向かって駆け出した。

送られたというか落された。（後書き）

走れ銀↑

出会い

銀が駆け出した瞬間、あたしたち目掛けて黄色く光る鎖が伸びてきて、巻きつこうとする。あたしはぎゅっと目を瞑り、銀は鎖を避けようと地を蹴った。しかし次の瞬間。

「逃がさん！！」

声がしたと思った瞬間、あたしと銀は別々に鎖に巻きつかれ、引き剥がされ、硬い床に叩きつけられた。あたしは呻きながら銀の様子を見ようと上半身を起こそうとすると、鎖からビリビリッと電気のようなものが体を流れた。

「ったあ！何これ・・・」

痛みに耐えながら銀を探すと、少しはなれたところに銀も同じように捕まって・・・いなかった。
彼は数人の魔術師っぽい方々相手に、唸って威嚇している。銀、強ーい！と感心していると、いきなり後ろから抱え上げられ、立たされ、背中から引き寄せられ。後ろから抱きつかれる状態になっている。

「動けば命はない」

耳の傍で囁かれた。声の低さ、背中に感じる硬い胸板から男だとわかる。動かないでいると、男が再び口を開いた。

「鎮まれ！！この女がどうなってもいいのか！！」

「！　グルゥゥゥゥ・・・・ガッ！！」

銀はあたしが捕まっていると解った途端、なんと魔術師っぽい人たちをあっという間に飛び越え、こちらに突進してきた。目がマジで怒っている。男は止まらない銀に舌打ちして、片方の手を前に出し、呟いた。

「天の盾よ」

すると手のひらから水の波紋のように淡い波のようなものが、ドーム状に男とあたしの周りになされた。銀はそれにぶつかる手前でなんとか立ち止まるが、男に対しての威嚇は止まらない。

「ふむ。魔術師共、手を出すな。そのままでいてくれよ・・・さて女、嘘はつくな。
何故ここに、何の目的で、どうやって入った」

男とあたしの姿勢は抱えあげられた時から変わっていない。つまり、あたしと男は威嚇している銀のほうを見ながら、あたしは後ろから男に抱かれているままである。２人とも銀のほうに向いた奇妙な体制のまま会話は続けられた。

「・・・知らないです。意味も、目的も、方法も」

だっていきなり送られたからね？拒否権ナシで。まさか初っ端から捕まって悪者扱いされるなんて思わなかったよ。空のやつ、覚えてろよ。

「・・・」

男は無言であたしの肩をつかみ振り向かせた。あたしと男は向かい合わせだ。

「・・・」

「・・・」

男の目は、あたしの目捉えた瞬間、見開かれて動かなくなったので、危害はないことを伝えようと思う。先手必勝。

「あたしたちは敵じゃないです」

男の目をまっすぐ見て言う。嘘じゃないんです、解ってください と目力を込めて。

目の前の男はあたしの声に我に返り、驚いたように何度か瞬きをして

「信じよう」

と言ってくれた。よかった。これで牢屋行きはないだろう。変な拷問なんかもなさそうだ。あたしはほっと溜め息をついて、銀を振り返って微笑んだ。

「銀、だいじょうぶだよ」

銀はそれまで男を睨んでいたが、あたしがだいじょうぶと言うとその警戒を少し解いた。

それを確認して、あたしは再び男に向き直った。

「信じてくださってありがとう。あたし蒼っていいます」

「・・・ディールだ。天座の長をしている」

ええ、知ってますよ。空から情報は貰ってますから。

「・・・ディールさま」

周りの魔術師達がおずおず申し出た。

「わかっている。アオ、敵ではないと信じるが、
お前は私の張った結界にやすやすと入り込んだ。どういうことか解るな？」

「・・・はい」

いや、わかりたくありませんけどね。

見逃してはもらえない

あれから魔術師は残ってその場の処理に、あたしと銀はディールの書斎に転送された。
いろんなジャンルの本がところ狭しと棚に並んでいる。立ち尽くしていると机の前にある長ソファに座れと促されたので素直に座った。
銀は後ろに座ってじっとディールを見つめている。

「・・・」

「・・・」

「・・・」

彼はあたしたちを探るように見つめたまま口を開く様子を見せない。あたしは切り出し方がわからないので黙っている。銀はゆっくりと瞬きを繰り返しながらディールを見つめている。

「・・・もう一度聞こう。アオ、何処から来た」

あたしは全て話すべきか否か迷った。
ディールは敵ではないと信じてくれたけど、あたしの味方ときまったわけじゃない。本当のことを話すのはためらわれた。でも敵じゃないと信じてくれた彼に嘘はつきたくなかった。

「・・・今は話せません」

「・・・ふむ」

彼は見つめていた目を少し伏せて考えるそぶりをみせ、もう一度私を見た。そして

「・・・アオの気（オーラ）は変わった色をしている」

ぼそりと呟いた。

「気（オーラ）」とは簡単に言うとこの世界で誰もが生まれながらに持っている、素質のようなもので、大きく5つに分かれている。天・火・水・地・風という属性があり、それは住んでいる土地の力の影響で現れる。

「・・・知っているだろうが気は我々が生まれ育つ土地の影響で身につく力だ」

天は中央に位置する都。そこで生まれ育ったものは天の気に大きく影響されている。

天の右、東は水の都。同様にして水の気に大きく影響されている。

天の左、西は風の都。同様にして風の気に大きく影響されている。

天の上、北は地の都。同様にして地の気に大きく影響されている。

天の下、南は火の都。同様にして火の気に大きく影響されている。

気の色も属性によって異なり、天は黄、火は赤、水は青、風は白、地は橙。

ディールは天の気だろう。彼が使った鎖は黄色に光っていたから。

力の内容は気の種類でだいたい想像できる。

「アオの気はどの属性だろうな。俺は生まれてからその色にお目

にかかったことがない」

「・・・」

そう、あたしの気の色はどの属性にも属さない緑色だ。ちなみに何の気かというと命の気。
これは生命力の力そのもので、この世界の神様である空の気だ。もちろん彼には話さない。とりあえず黙っておこう。

「さて・・俺の結界を割って入った件だが。あれを破いて中に入ったのはアオが初めてでな」

話題が変わり、ディールの顔つきが変わった。口角が上がり綺麗な弧を描いている。しかし目が怖い。切れ長の翡翠色の目がどこか楽しげにあたしを見ている、ような気がする。
たぶんあたしの顔は今かなり引きつっているだろう。

「・・・そうなんですか」

「ああ、そうだ。あそこは神聖な場所で普通立ち入り禁止だ。アオは不法侵入したことになる。
さて・・・どうしようかな？」

「・・・」

にっこりと問われ、あたしは顔がさらに引きつるのを感じた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0686z/

世界って広いんだね

2011年12月20日21時53分発行